

【論文】

『蜻蛉国志』日本書籍の記述について

朴 知 恵

1 はじめに

『蜻蛉国志』は18世紀に朝鮮の実学者である李徳懋によって編纂された日本国志である。河宇鳳氏は『蜻蛉国志』の資料価値について以下のように述べた。

一は、『蜻蛉国志』は日本の文化に対して豊かな内容を持っており、朝鮮後期に於ける韓日文化交流の研究に重要な資料と考えられる。一つその例を挙げると『蜻蛉国志』には多くの日本書籍が紹介されており、これは日本書籍の朝鮮への流入・伝来史研究、または朝鮮通信使の活動の研究に欠かせない資料と考えられる。二は、朝鮮後期の知識人が日本をどのように認識してその理解の水準はどうだったのかを知るためにもとても重要な資料と考えられる。通信使一行ではない実学者が著した唯一の日本国志という点から朝鮮後期の実学者達の対外認識の研究にも必ず参考しなければならないと考える¹。

18世紀の朝鮮は一般人が日本に渡航することは困難であり、日本関連の書籍も日本を訪問した通信使などによって書かれていた。河宇鳳氏の指摘通り『蜻蛉国志』が来日経験のない李徳懋によって編まれたということは、朝鮮における一般知識人の日本認識が窺える点において重要である。また、『蜻蛉国志』には日本の書籍名が散見する。そのなかでも「芸文」には、日本の詩文と学問の起源、詩文と書画の名人の紹介、日本の文化の発展に功労した四人、史書、国字31字、中国との同語異義字42字、伊呂波、片仮名、漢字音の記述と共に日本書籍の紹介がある。この日本書籍について河宇鳳氏は傍線部で朝鮮への流入・伝来史研究や通信使の活動研究に欠かせない資料と述べているが、李徳懋の「著名、著者名」の記述を検討すると、『蜻蛉国志』編纂の時点では日本書籍の朝鮮への流入、伝来はほぼ考えられない。本稿ではこのことについて明らかにしたい。

2 李徳懋『蜻蛉国志』について

本論に入る前に李徳懋の『蜻蛉国志』がどのようなテキストであるのか確認しておく。『蜻蛉国志』の現存唯一本は駒澤大学図書館にある。駒澤大学図書館所蔵への経緯は、植民地時代に金澤庄三郎によって日本に持ち込まれ、戦後、濯足庵に保管されたものが1974年に駒澤大学

図書館へ寄託された²。この写本のマイクロフィルムや写真が駒澤大学図書館³、東洋文庫⁴、韓国の国立中央図書館で閲覧できる。また、『青莊館全書』⁵卷之六十四にも収録されており、駒澤大学図書館本にはない句読点を施しているものの、その打ち方に誤りが見られる⁶。

『蜻蛉国志』の「蜻蛉」は日本を指す言葉であるが、『蜻蛉国志』の本文のなかで「蜻蛉」に言及するのは、「豊秋津洲、此神武時、始為国号。蓋秋津者、蜻蛉蟲之倭名也。地形似蜻蛉、因以為名」⁷という記事のみである。日本の地形が蜻蛉の形をしていることから秋津と称したという記述で、依拠資料として『日本書紀』の神武天皇条⁸をあげるまでもなく、広く知られることではあるが、『和漢三才図会』⁹卷六十四「大日本国」の「豊秋津洲〈神武天皇始為国号蓋秋津者蜻蛉蟲之和名也国形畧以乎蜻蛉因以為名〉」と酷似していることに注目しておきたい¹⁰。また、李徳懋の死後、柳得恭が書いた「蜻蛉国志序」¹¹では「蜻蛉国者。日本別称。其国地形有似蜻蛉故云」と、「蜻蛉国」は日本の別称であり、その由来を地形に求める認識は李徳懋とも共通する。また、李徳懋は『青睥録』第四卷に日本の漢詩を六十七首挙げているが、その題目を「蜻蛉国詩撰」¹²としており、「蜻蛉」は彼のお気に入りの名称であったと想像できる。しかし、李徳懋が「秋津」ではなく「蜻蛉」を採用したことは興味深い。朝鮮における日本関連書籍の書名をみると、『扶桑録』(1719)、『扶桑紀行』(1719)、『日本日記』(1784)、『和国志』(1763)、『日本録』(1763)のように日本や日本の別称を書名にする例や、『東槎録』(1711)、『海游録』(1719)、『海槎日記』(1763)のように渡海を表す書名の例などが見受けられるが、「蜻蛉」という虫の名称を用いる例は珍しい。依拠資料である『和漢三才図会』に依ったことから想定できる。李徳懋が『和漢三才図会』をいつ手に入れたかは明確ではないが¹³、頤齋・黄胤錫の記録(10歳から死去した63歳まで記す)である『頤齋乱藁』の記述から大体の時期が推し量れる。1778年12月5日条には黄胤錫が李徳懋を訪ねたが、不在であったため弟の功懋に『和漢三才図会』を見せてもらった¹⁴という記述があり、1778年12月以前にはすでに『和漢三才図会』が李徳懋の手元にあったことが確認できる。また、李徳懋にとって『和漢三才図会』がどのような書籍であったか窺える記述が『雅亨遺稿』¹⁵にある。李徳懋は元若虚から「馬櫛木」の字に関する質問をうけ、馬櫛木が鞭や杖であることはわかるが、どのようなものであるかは知らないと答え、あなたと共に『本草綱目』『群芳譜』『和漢三才図会』などの書を持って村の人々に逢い、実際俗名を験し、図経を作ることができないことを恨む¹⁶ということである。『本草綱目』は明の医師李時珍が各地を旅行しながら、その地方独自の民間療法を調査し、26年を費やして完成した本草書である。朝鮮への伝来は宣祖(在位1567~1608)以降と推測されている¹⁷。また、『群芳譜』即ち『二如亭群芳譜』は、明の王象晋が書いた本草学書であるが、李徳懋の文集『青莊館全書』にも散見される書名である。このような書籍と共に『和漢三才図会』は李徳懋にとって重要な本草学書であった。さらに李徳懋は植物や昆虫の名称に興味を持っており、自分の書齋に「注蟲魚齋」や「学草木室」という扁額を付けるほどであっ

た¹⁸。「注蟲魚」は韓愈の詩「爾雅注蟲魚、定非磊落人」から、草木、鳥獸、蟲魚に注を付けることを意味する。「学草木室」は文字通り草木を学ぶ室のことである。このような点を踏まえ、と李徳懋は「秋津」よりは関心のある昆虫の名称「蜻蛉」を用いて書名にしたのであろうと考えられる。

序文や跋文がないので、『蜻蛉国志』の正確な著述時期は明らかではない。ただ、『蜻蛉国志』世系に「今戊戌、自元祿、至今、其僞皇号及昭穆之次」とあり、「今戊戌」とは、正祖 20(1778)年を指す。この年は 38 歳の李徳懋が燕から戻って『入燕記』を著述していた時期であるが、同時期に『蜻蛉国志』の著述も始めたことになる。また、李徳懋は成大中などに『蜻蛉国志』の評を頼んでいるのだが¹⁹、これはその前後の記述から徳懋が積城縣監だった時期(1784～89)であることがわかる。それらを踏まえ、『蜻蛉国志』の著述時期は 1778 年頃から 1789 年の間とする見解が一般的である。1778 年以前に李徳懋の手元に『和漢三才図会』があったこととそれ以降『蜻蛉国志』を著作したことは注目すべきである。

それでは李徳懋がどのような人物であったのか簡略に見ておきたい。李徳懋は英祖 17(1741)年に漢城で生まれた²⁰。全州李氏璿派で定宗大王の別子茂林君の十世孫であり、祖父必益は江界府使を、父聖浩は通徳郎を務めた。字は明叔・徳官、公号は青莊館、一号には蟬橘堂、炯菴、端坐軒、注蟲魚齋、學草木堂、香草園、寐宕、雅亭があり、『雅亭遺稿』・『青莊館全書』という文集がある²¹。李徳懋は庶孽出身であったため身分の制約があり、出世とは無縁であった。そのため、科挙準備の学問ではなく、広い学問の道に進んだ。正祖 2 年 38 歳の時には赴燕使書状官の沈念祖に従って燕京へ行き、その際に『入燕記』を著した²²。翌年、正祖 3(1779)年奎章閣に選拔され亡くなる 1793 年まで務めていた²³。李徳懋に日本に関する見聞と知識を教えたのは元重挙と成大中だとされる²⁴が、元重挙は日本使行録である『和国志』を、成大中は『日本録』を著しており、それぞれ『蜻蛉国志』の典拠資料となっている。

3 日本書籍—『和漢三才図会』依拠について

『蜻蛉国志』の「芸文」にみえる日本書籍の記述は以下のとおりである。やや長いが全文を記す。

日本書籍不可殫記略載聞見漫無次序。塵劫記、吉田氏著。新古今集、新勅撰集、藤正家著。続古今集、続後撰集、藤為家著。新続古今集、藤雅世著。万葉和歌集、竹取翁著。源氏物語、紫式部著。羅山文集、林道春著。太平記、玄恵著。元亨釈書、虎関著。桃蕊編、道宗著。天下白、漆桶居士著。経国集、島峯安世著。扶桑略記、皇円著。奥儀抄、清輔著。朗咏集、公任卿著。諸経要文、親鸞著。選擇集、源空著。教行信証、親鸞著。慕京集、源道灌著。弥陀経注記、曼陀羅抄、西誉著。庭訓、玄恵著。安国論、日蓮著。甲陽軍鑑、高坂

彈正著。法華經注、最澄著。研心章、護命著。十住心論、空海著。金光明經注、仁王經注、無量義經注、最澄著。天台義集、義真著。一乗要訣、往生要集、阿弥陀經疏、大乘対俱舍抄、天台宗二十七疑問、恵心著。嘉文乱記、垂水広信著。徒然草、兼好著。広釈流義、宇多倭皇著。挙白集、勝俊著。大悉曇章、安然著。花伝抄、専慈著。小卷物大卷物秘伝抄、専好著。宝物集、平泰頼著。狂雲集、宗純著。帰命本願抄、西要抄、往生至要訣、證賢著。観經疏記、円空著。愚禿抄、文類聚抄、親鸞著。立正治国論、日親著。三国仏法伝通縁起、凝然法師著。律令、淡海公著。浄土源流章、凝然法師著。聖筆縁起、菅丞相著。諸経注釈、常騰著。無明抄、長明著。宝蓮華寺縁起、義教著。蕉堅集、蕉堅語録、中津著。民部省礼、清麻呂著。峩草稿、月潭和尚著。僧宝伝、高泉著。四書疏林、竹田誠直著。童子問、論孟古義、論孟字義、伊藤維禎著。徂徠集、論語微、物部雙柏著。和漢名数、貝原篤信著。和漢三才図会、寺島尚順著。

其纂書人不可弁者曰。弁色立成。平家物語。浄琉璃著聞集。公事根源。奇異雜談。懷風藻。古今倭歌集。作者部類。姓氏録。伊勢物語。和漢軍記。西宮記。耆婆万病円。天木集。枕双紙。良材集。清少納言。本朝食鑑。聖皇本記。谷響集。世風記。世彦物語。聴雨齋集。江家次第。四季物語。寂寞草。群忌際集。宝積寺縁起。方角抄。神社啓蒙。風土記。帝王編年紀。一宮記。碧岩集。神仙伝。職原抄。大全大双紙。義楚六帖。五鳳集。類聚国史。本朝文粹。鎌倉志。陸奥話記。人雲御抄。北條九代記。塵冢物語。懷中集。源平盛衰記。東鑑。奥州後三年記。神系図縁起略。大和本紀。埃囊抄。八大童子軌。鎌倉大草子。法眼淨賀伝。瓜雅集。方丈記。智證太師年譜。卜部家説。円応禪師語録。安樂外記。万代集。太神宮式。神名略記。神名帳。儀式帳。河海抄。春雨集。松下集。職員令。王年代紀。二水記。駿牛絵詞。辞世集。人群集。某経。築波集。犬築波集。過去帳。神代卷。性霊集。竹取物語。住吉旧記。鉤狐狂言。持名抄。熊野御幸記。熊野王子記。紀貫之集。続古事談。政事略。峰相記。二十二社注式。金玉集。玉葉集。東齋隨筆。明玉集。撰集抄。十訓抄。社説。下学集。乾元二年記。源氏玉葛卷。六状。樽桑文選。武刃兵術冊。袖中抄。訓閲集。諸神記。名法要記。正統紀。百練抄。其格式之書曰、弘仁格、弘仁式、貞観格、貞観式、延喜格、延喜式也。二十一代和歌集者、凡二十一種、皆録日本之歌詞。其余書籍、壬辰入寇朝鮮多掠取翻刻。

日本の書籍については「彈記すべからず、略して聞見を載するに漫ろにして次序無し。」と書籍名と著者を記したものと、「其の纂書の人、弁ずべからざるものは曰く」と書籍名のみを記したものがあつた。この日本書籍の典拠についてはまだ明らかになっていない。しかし、これだけの日本の書籍が朝鮮に伝来したとは考え難く、奎章閣勤めの李徳懋であっても直接触れた可能性は低いと、何らかの他の書籍を参照して書いたと推定できるが、文章はなく書籍名・著者という情報しかないために特定することは難しい。しかし、不審な書籍名や著者名から一部は典

拠を見出せると考える。

まず、「万葉和歌集、竹取翁著」という記述からみていく。「万葉和歌集」はおそらく『万葉集』のことであろう。現在、『万葉集』の編者は未詳だが、大伴家持の手が加わっているとされている。管見の限り『万葉集』を「竹取翁」著とする文献は見受けられないものの、『和漢三才図会』巻第七十三「大和」には気になる記述がある。

竹取翁今和州鷹取城其宅印臼跡也云。然竹取物語所謂翁住于駿河国大網里人也。與此別矣。

蓋竹取翁逢九人仙女贈答歌有万葉集。

『万葉集』の中に竹取翁の歌と九人の仙女との贈答歌が収録されたという記述である。ここでも『万葉集』であって『万葉和歌集』ではないが、贈答歌とあるために「和歌」の文字を加えた可能性はある。また、李徳懋は「贈答歌有万葉集」という記述から「竹取翁」をその著者と誤ったのではないか。

次は「一乗要訣、往生要集、阿弥陀経疏、大乘対俱舍抄、天台宗二十七疑問、恵心著。」という記述だが、ここで問題となるのは「天台宗二十七疑問」という書名である。この「天台宗二十七疑問」は、長保5（1003）年に寂照が入宋のとき託した知礼への質問状であり、これに対する返答「答日本国師二十七問并序」が『恵心僧都全集』第二巻や『四明尊者教行録』第四に所載されるが、「天台宗二十七疑問」という書名は見当たらない。ただ、『和漢三才図会』巻第七十一「近衛」恵心院は以下のことを記す。

嘗作天台宗二十七疑問于宋国知礼法師。知礼嗟嘆其深志、乃造答釈、返之。

『和漢三才図会』では『蜻蛉国志』と同じように恵心著書を羅列した後、「天台宗二十七疑問」を作って宋国の知礼法師に送ったことを記していたため、李徳懋が書名として挙げたのであろう。

次は、「小巻物大巻物及秘伝抄、専好著」という箇所だが、ここでは「小巻物大巻物」が問題となる。専好の著作の中、『秘伝抄』が付く書名は『立花秘伝抄』、『池之坊立花大巻秘伝抄』であるが、「小巻物大巻物」という秘伝抄は確認できない。これも『和漢三才図会』巻七十二末「山城」に「中興有専好者。堪能定法式。家有小巻物大巻物及秘伝抄。而門人習之」という記述に依拠したと考えられ、「小巻物大巻物」はおそらくその類（ここでは秘伝抄）のものをまとめて指した総称であるかもしれないが、書名としては確認できない。

最後に「蕉堅集、蕉堅語録、中津著」である。中津の著書には『絶海和尚語録』や『蕉堅藁』、『絶海国師偈頌』、『珍海録』、『文格秘要集』があるが、「蕉堅集、蕉堅語録」は見受けられない。上記と同様、『和漢三才図会』を参照すると、ただ「有語録及詩文集」とあるのみで、また中津が「蕉堅道人」と自称した記述があるので、おそらく李徳懋は「蕉堅集、蕉堅語録」と書いたと考えられる。

以上のことから『蜻蛉国志』の日本書籍の記述は『和漢三才図会』に依拠していたことが想

定できる。これを前提にして『蜻蛉国志』と『和漢三才図会』の書名及び著者名の対照表を作成した。なお、『蜻蛉国志』の書名、著作名の正誤についてはひとまず保留とするものである。

蜻蛉国志		和漢三才図会		
書名	著者	書名	著者	巻
塵劫記	吉田氏	塵劫記	吉田氏	15-芸器
新古今集	藤正家	新古今集	(藤氏) 定家	7-人倫類
新勅撰集	藤正家	新勅撰集	(藤氏) 定家	7-人倫類
続古今集	藤爲家	続古今集	(藤氏) 為家	7-人倫類
続後撰集	藤爲家	続後撰集	(藤氏) 為家	7-人倫類
新続古今集	藤雅世	新続古今集	(藤氏) 雅世	7-人倫類
万葉和歌集	竹取翁	万葉集	(竹取翁)	73-大和
源氏物語	紫式部	源氏物語	紫式部	71-近衛
羅山文集	林道春	羅山文集	林道春	67-武蔵
太平記	玄恵	太平記	玄慧	67-相模
元亨釈書	虎関	元亨釈書	虎関	70-越前
桃蕊編	道宗	桃蕊編	道宗	74-摂津
天下白	漆桶居士	天下白	漆桶居士	70-美濃
経国集	島峯安世	経国集	島峯安世	57-水類
扶桑畧記	皇円	扶桑畧記	皇円	69-遠江
奥儀抄	清輔	奥儀抄	清輔	16-芸能
朗詠集	公任卿	朗詠集	公任卿	96-蔓草類
諸経要文	親鸞	諸経要文	親鸞	66-下野
選択集	源空	選択集	源空	66-下野
教行信証	親鸞	教行信証	親鸞	72 末-山城
慕京集	源道灌	慕京集	道灌姓源氏	67-武蔵
弥陀経注記	西誉	弥陀経注記	西誉	67-武蔵
曼陀羅抄	西誉	曼陀羅抄	西誉	67-武蔵
庭訓	玄恵	庭訓往来	玄慧	67-武蔵
安国論	日蓮	安国論	日蓮	67-武蔵
甲陽軍鑑	高坂弾正	甲陽軍鑑	高坂弾正	68-信濃
法華経注	最澄	法華経注	最澄	71-近衛

『蜻蛉国志』日本書籍の記述について

研心章	護命	研心章	護命	71-近衛
十住心論	空海	十住心論	空海	71-近衛
金光明經注	最澄	金光明經注	最澄	71-近衛
仁王經注	最澄	仁王經注	最澄	71-近衛
無量義經注	最澄	無量義經注	最澄	71-近衛
天台義集	義真	天台義集	義真	71-近衛
一乗要訣	恵心	一乗要訣	恵心	71-近衛
往生要集	恵心	往生要集	恵心	71-近衛
阿弥陀經疏	恵心	阿弥陀經疏	恵心	71-近衛
大乘対俱舍抄	恵心	大乘対俱舍抄	恵心	71-近衛
天台宗二十七疑問	恵心	天台宗二十七疑問	恵心	71-近衛
嘉文乱記	垂水広信	嘉文乱記	垂水広信	71-伊勢
徒然草	兼好	徒然草	吉田兼好	71-伊賀
広釈流義	宇多倭皇	広釈流義	宇多天皇	72 末-山城
挙白集	勝俊	挙白集	勝俊	72 末-山城
大悉曇章	安然	大悉曇章	安然	72 末-山城
花伝抄	専慈	花伝抄	専慈	72 末-山城
小巻物大巻物秘伝抄	専好	小巻物大巻物秘伝抄	専好	72 末-山城
宝物集	平泰頼	宝物集	平泰頼	72 末-山城
狂雲集	宗純	狂雲集	宗純	72 末-山城
帰命本願抄	証賢	帰命本願抄	証賢	72 末-山城
西要抄	証賢	西要抄	証賢	72 末-山城
往生至要訣	証賢	往生至要訣	証賢	72 末-山城
観経疏記	円空	観経疏記	円空	72 末-山城
愚禿抄	親鸞	愚禿抄	親鸞	72 末-山城
文類聚抄	親鸞	文類聚抄	親鸞	72 末-山城
立正治国論	日親	立正治国論	日親	72 末-山城
三国仏法伝通縁起	凝然法師	三国仏法伝通縁起	凝然法師	73-大和
律令	淡海公	律令	淡海公	73-大和
浄土源流章	凝然法師	浄土源流章	凝然法師	73-大和
聖筆縁起	菅丞相	聖筆縁起	菅丞相	73-大和
諸経注釋	常騰	諸経注釈	常騰	73-大和

無明抄	長明	無明抄	長明	75-河内
宝蓮華寺縁起	義教	宝蓮華寺当寺縁起	義教	75-河内
蕉堅集	中津	詩文集	中津	79-阿波
蕉堅語録	中津	語録	中津	79-阿波
民部省礼	清麻呂	民部省例	清麻呂	80-豊前
峩草稿	月潭和尚	峩草稿	月潭和尚	80-肥前
僧宝伝	高泉	僧宝伝	高泉	65-陸奥
四書疏林	竹田誠直			
童子問	伊藤維禎			
論孟古義	伊藤維禎			
論孟字義	伊藤維禎			
徂徠集	物部雙柏			
論語微	物部雙柏			
和漢名数	貝原篤信			
和漢三才図会	寺島尚順			

表にしてみると、一部異なる部分があるものの、基本的には『蜻蛉国志』において言及される日本書名は『和漢三才図会』の巻の順番にならび、しかも同じ巻のものがまとまっていることに気付く。それでは『和漢三才図会』の同じ巻における順序についていくつかの例をみていきたい。『蜻蛉国志』で「新古今集、新勅撰集、藤正家著。続古今集、続後撰集、藤為家著。新続古今集、藤雅世著。」と記述される箇所は、『和漢三才図会』巻第七倫類では以下の順番で記されている。

○藤氏 冷泉

俊成其子定家〈撰新古今集及新勅撰集〉其子為家〈撰続後撰集及続古今集〉

○藤氏 花山院 飛鳥井

雅経為新古今集撰者、其後雅世亦為新続古今集撰者、以来飛鳥井兼和歌家

このように『和漢三才図会』の順序と『蜻蛉国志』が一致することがわかる。また「藤原」の名字を「藤」と表記したことも『和漢三才図会』の「藤氏」にならい、「氏」を省略して記したと想定できる。ただ、「定家」を「正家」と記しており疑問であるが、これについては後に触れたい。

もう一つの例をみてみたい。『和漢三才図会』巻七十一を典拠とする「源氏物語、紫式部著」「法華経注、最澄著。研心章、護命著。十住心論、空海著。金光明経注、仁王経注、無量義経注、最澄著。天台義集、義真著。一乗要訣、往生要集、阿弥陀経疏、大乘対俱舍抄、天台宗二

十七疑問、恵心著。嘉文乱記、垂水広信著。徒然草、兼好著。」を『蜻蛉国志』における記述順に番号を書名の上に振った『和漢三才図会』の当該箇所は以下の通りである。

○伝教大師 初名最澄

謚伝教大師²〈法華經注十二卷、金光明經注五卷⁵、仁王經注三卷⁶、無量義經注三卷⁷、其外有撰述。〉

○義真和尚

護命作研心章³〈褒法相〉、空海著⁴十住心論〈贊密教〉、義真造⁸天台義集世皆伝之、

○恵心院

著⁹一乗要訣、往生要集¹⁰、阿弥陀經疏¹¹、大乘対俱舎抄¹²、因明相違注釈等也。時号恵心院僧都。

嘗作¹³天台宗二十七疑問于宋国知礼法師。

○紫式部

嘗到石山寺、撰源氏物語¹、若干卷其言、倣莊子之寓言、以仮為真。

○垂水広信

著書名曰嘉文乱記¹⁴、凡六十五卷。

○吉田兼好之墓

著書二卷名徒然草¹⁵、行于世。

「源氏物語、紫式部著」の順番が『和漢三才図会』とは異なるのが大きな特徴といえる。李徳懋は紫式部に興味を持っていたようである。紫式部については聖徳太子、仲麻呂、平実時とともに日本文化、特に漢籍関連で重要な人物として『和漢三才図会』に依拠して『蜻蛉国志』「芸文」に記されている。ただ、表から確認できるように巻の入れ替えが見られる部分の記述「万葉和歌集、竹取翁著。源氏物語、紫式部著。羅山文集、林道春著。太平記、玄恵著。元亨釈書、虎関著。桃蕊編、道宗著。天下白、漆桶居士著。経国集、島峯安世著。扶桑略記、皇円著。奥儀抄、清輔著。朗咏集、公任卿著。」の箇所をみると、紫式部の次に言及される林道春は『蜻蛉国志』「人物」に林道春の生涯と林家について記されるものの、他の書籍や著者に注目した記録はなく、羅列の基準が不分明である。さらに『和漢三才図会』だけでは説明できないところがある。最初の和歌集の記述のなか『和漢三才図会』にはある「雅経為新古今集撰者」が『蜻蛉国志』にはない。同じく、恵心の著書の記述で『和漢三才図会』にはある「因明相違注釈」が『蜻蛉国志』にはない。また、伝教大師の著書名が『和漢三才図会』と『蜻蛉国志』では順番の入れ替えがみられる。これについてはいくつの可能性があると考ええる。まず、版本の違いである。現在、韓国においては正徳3年(1713)序本(成均館大学尊経閣)と安永元年(1772)序本(奎章閣韓国学研究院)、刊行年未詳本(嶺南大学校図書館、国会図書館資料収集科)が残っており、これらの版本がいつどのように伝来したかは不明である。また、写本の可能性もあるが、現存資料では確認できないので判断ができない。もう一つは、李徳懋は関心を持った書

籍を紙に書きとめ、それを『蜻蛉国志』に書き写した際、入れ替わった可能性である。上記で「定家」の表記を『蜻蛉国志』では「正家」と記したことを確認したが、『蜻蛉国志』「人物」には「藤原肅。字斂夫。号惺窩。京極黃門定家之孫。」と、「定家」と記す。「定」と「正」はハングルだと「정(ジョン)」であり、同音になることから混同したと考える。また、「玄慧」を『蜻蛉国志』では「玄恵」に、「民部省例」を「民部省札」に間違っているが、これもそれぞれ「혜(ヘ)」と「예(イエ)・례(レ)」で同音である。このような同音表記の誤りは日本語ではなく朝鮮語の中で行われたものである。ただ、『蜻蛉国志』が孤本である上、いつ書写されたか確認できないため、李徳懋の編纂段階での誤りか、書写段階での誤りかは不明である。

李徳懋はどのような書籍に興味を持って書きとめていたのか。『蜻蛉国志』の書名からは和歌や儒教関連の書籍に対する関心が窺える。さらに『和漢三才図会』の依拠箇所を確認すると、最も多い記述が「世皆伝之」「行于世」「伝于世」であり、世に普及した書籍としてあげているものである。たとえば、「塵劫記、弥陀経注記、曼陀羅抄、太平記、庭訓、天下白、扶桑略記、研心章、十住心論、天台義集、徒然草、挙白集、帰命本願抄、西要抄、往生至要訣、観経疏記、三国仏法伝通縁起」がそれに該当する。李徳懋は日本で広まった書籍を押さえておき、いずれ手に入れたと思ったかもしれない。

4 朝鮮へ伝来した日本書籍

『蜻蛉国志』の依拠資料として『和漢三才図会』があることは既に指摘されているが²⁵、日本書籍の記述も『和漢三才図会』に依拠することが確認できた。ここで、依拠資料である『和漢三才図会』を「書名・著者名」の記述の最後においたことに注目したい。『蜻蛉国志』において『和漢三才図会』の前に言及される書籍、「四書疏林、竹田誠直著。童子問、論孟古義、論孟字義、伊藤維禎著。徂徠集、論語微、物部雙柏著。和漢名数、貝原篤信著。」も『和漢三才図会』の本文からは確認できなかった。これらの書籍に於いては『和漢三才図会』と同様、実見していた可能性がある。何故ならば、『和漢名数』も『蜻蛉国志』の依拠資料としてすでに指摘されているからである。たとえば、『蜻蛉国志』「芸文」の日本の三部本書、日本六国史の記述は『和漢名数』第十一経籍類に依拠している。さらに、『蜻蛉国志』「世系」に「子元祿案此世系、從貝原篤信所編」と、李徳懋自身が貝原篤信の『和漢名数』を参照したことを明かしている。『和漢名数』は現在、韓国においては、国立中央図書館に「元祿五年壬申(1692)初冬吉辰洛陽書室長尾氏梓行」と刊記があるものと、無刊記のものの二種類が確認できる。朝鮮への伝来時期は不明であるが、朝鮮の実学派の巨匠である李瀾の『星湖僊説』にその書名が散見される。李瀾は1758年に『和漢名数』の噂を聞きつけてそれを求めた際²⁶、安鼎福から手紙をもらっている。曰く、通信使から『和漢名数』を借りたものの、すぐに返却した²⁷ということであった。

通信使による伝来であれば、1758年の直前は戊辰（1748）通信使であるため、朝鮮には少なくとも1748年以前には伝来されていたことになる。

次に「童子問、論孟古義、論孟字義、伊藤維禎著。」に示された書物の伝来についてみていく。伊藤維禎の著書に関しては洪景海が戊辰通信を記録した『随槎日録』4月22日条²⁸が参考になる。この書によれば洪景海はソウルで既に『童子問』を読んでおり、戊辰通信使で日本を訪れた際、訳官を通して『論孟古義』と『論孟字義』を手に入れたという。すると、『童子問』は1748年以前に朝鮮へ伝来されており、『論孟古義』、『論孟字義』は少なくとも1748年には伝来したことになる。「童子問、論孟古義、論孟字義、伊藤維禎著。」については、『蜻蛉国志』の「芸文」以外に「人物」²⁹にも言及しており、おそらく「人物」の記述から著書名や著者名を抜粋したと考える。『蜻蛉国志』の依拠資料の一つである『和国志』第二巻「異端之説」にも「伊藤維禎」の記述があるが、『蜻蛉国志』の方が詳しい。また、李徳懋の著書である『壺葉記』³⁰にも『童子問』のことが論じられているため、李徳懋が実見していたであろうことが想定できる。

最後に「四書疏林、竹田誠直著。」と「徂徠集、論語徴、物部雙柏著。」の記述だが、『蜻蛉国志』「人物」の記事が手掛かりになる。以下関連部分のみを記す。

物部雙柏。字茂卿。號徂徠。又號護園。陸奥州人。遊學四方。詩文。從李滄溟。王弇州。入体格奇健。其為學。則得反己之方。而頗詆程朱。著論語徴。有詩文集百余卷。蓋雙栢。以奇偉特拔之才。受東武累世之殊体。儼然為八州操觚者之宗師。亦海外之傑士也。嘗以華音。先授韻書於其徒。然後授以他書。江戸之岡孝先。西京之播磨清綯。大坂之永富鳳。長門州之瀧長凱。皆其徒之著名者也。（中略）筑前州。有竹田誠直者。号春菴。著四書疏林。主洛関之學。其子定直。号西溟。能繼家學云。

この文書から傍線部の書名や著者名のみを抜粋して記したと考えられるが、ただ、『徂徠集』ではなく「詩文集」となっている。これは『蜻蛉国志』の「蕉堅集、蕉堅語録、中津著」が『和漢三才図会』では「有語録及詩文集」であったことと同じ記し方である。竹田誠直の記述は『和国志』³¹第二巻「学問之人」を、物部雙柏の記述は『和国志』第二巻「異端之説」を依拠とし、略記する。しかし、波線部に示したように『蜻蛉国志』の独自記述及び、『和国志』では「王世貞」であることを「王弇州」に、「李于鱗」であることを「李滄溟」という別称で書き直している箇所が見られる。『四書疏林』は『和国志』の略記以外は李徳懋の著書では確認できず、実見した可能性は低いと考えられる。『徂徠集』『論語徴』に関してもこれ以上の記述がないので、李徳懋が書籍を実際見たのか、それとも通信使など日本の儒学に詳しい人物から徂徠の理論を聞いて述べているのかは不明である。

5 今後の課題

本稿では『蜻蛉国志』の日本書籍の記述のうち、「書籍名、著者名」の記述の依拠資料が『和漢三才図会』であり、後半の書籍については李徳懋が実見したもの、あるいは実見した可能性があるものであることを確認した。従って『和漢三才図会』を依拠とする部分に限っては「日本書籍の朝鮮への流入・伝来史研究、または朝鮮通信使の活動の研究に欠かせない資料」³²として用いることは難しくなった。これは李徳懋の「殫記すべからず、略して聞見を載するに漫ろにして次序無し。」という記述方針通りで、聞いたものつまり『和漢三才図会』を通して情報を得たものを記し、その後確実に実見した可能性が高いものを記している。しかし、「其の纂書の人、弁ずべからざるものは曰く」という書籍名のみ記述は『和漢三才図会』に依拠しないものも多くあり、書籍名のみという少ない情報からその依拠資料を特定することは困難であろうと思われるが、今後の課題としておきたい。

＊本稿は第8回明治大学・高麗大学校学術交流行事（2015年9月10日）にて「十八世紀朝鮮知識人に於ける『和漢三才図会』受容について—『蜻蛉国志』に見える日本書籍の記述を中心に」という題で口頭発表したものに手を加えたものである。

注

-
- (1) 河宇鳳「李徳懋の『蜻蛉国志』について」(『全北史学』9 1985年12月)。翻訳は執筆者による。
 - (2) 『濯足文庫目録』「660 日本地誌(含朝鮮) 710 蜻蛉国志」
 - (3) 駒澤大学の電子貴重書庫(レコードID: YA00020516)
 - (4) 請求番号 VII-2-437-0
 - (5) 『青荘館全書』(『韓国文集叢刊』二五七～二五八 民族文化推進會 2000年)。以下、『蜻蛉国志』をはじめとする李徳懋の著書の本文引用はこの書によったが、句読点や訓読は執筆者による。
 - (6) たとえば、「徂徠集。論語徴物部。雙柏著。和漢名数貝。原篤信著」と、「物部雙柏」や「貝原篤信」を誤っている。
 - (7) 『蜻蛉国志』第二巻「輿地」
 - (8) 『日本書紀』聖武天皇三十一年夏四月乙酉朔「皇輿巡幸。因登腋上曠間丘、而廻望国状曰、妍哉乎国之獲矣。〈妍哉、此云執奈珥夜〉。雖内木綿之眞迨国、猶如蜻蛉之臀帖焉。由是始有秋津洲之号也。」(坂本太郎校注 新日本古典文学大系 岩波書店 1994年)
 - (9) 以下、『和漢三才図会』の本文引用は毛利家旧蔵本(現、明治大学蔵。澁川清右衛門板、正徳5年(1715))による。
 - (10) 河宇鳳(注1掲載)氏は『日本書紀』典拠とみるが、類似性から考えると『和漢三才図会』を典拠

とするのが妥当であろう。

(11) 柳得恭 (1784~1807) の文集『冷齋集』(『韓国文集叢刊』二六〇 民族文化推進会 2000 年) に収録。

(12) 『青莊館全書』三十五

(13) 『和漢三才図会』は医者寺島良安によって 30 余年かけて編纂され、正徳から享保の間に刊行された。

『和漢三才図会』の伝来に関する先行研究(安大衛「18・19 世紀の百科全書派と『和漢三才図会』」(『大東文化研究』2010 年 2 月))によると、朝鮮通信使の記録にこの書名が散見されるようである。戊辰使行(1748)を記録した曹命采の『奉使日本時間見録』「聞見総録」倭京に、「今見倭国所謂三才図」の表記で初見されるが、これは日本で見聞したという記述であり、見聞した後に朝鮮へ将来したかは確かめられない。癸未使行(1763)を記録した南玉の『日観記』3 月 27 日条には「周宏為余、購倭漢三才図会来、行中署為披覧」とあり、周宏が南玉のために『和漢三才図会』を購入し、皆に披露したことが記される。

(14) 『頤齋乱藁』(『韓国学資料叢書』三 韓国精神文化研究院 2001 年)「歷謝李生德懋於大寺洞朴判書宗徳家前。則李生出外未帰。其弟功懋在焉。自言丁丑生。端修可愛。亦可語古今者。因見倭漢三才図会。」

(15) 『青莊館全書』九~二十

(16) 『雅亭遺稿』七「俗稱馬櫛木。原号何字。馬櫛木只知為鞭与杖。而不知為何物。恨不与足下齋本草綱目群芳譜和漢三才図会等書、逢田父野叟、驗其俗名、仍為図経也。世儒聞不佞言。未不齒冷。然此事猶可与足下言耳。」

(17) 오재근・김용진「朝鮮後期『本草綱目』の伝来と活用」『医史学』20-1 2011 年 6 月

(18) 『清脾録』三(『青莊館全書』三十四)「韓文公詩曰。爾雅注蟲魚。定非磊落人。元道州詩曰。借問多壽翁。何方自脩育。惟云順所然。忘情學草木。余取此義。扁之曰注蟲魚齋。亦曰學艸木室。」

(19) 『雅亭遺稿』八(『青莊館全書』十六)「濱行投贈。則敢不評鷺之耶。蜻蛉國志。」

(20) 『先考積城縣監府君年譜』(『清莊館全集』七十に収録。以下、『年譜』)「辛酉六月十一日戌時。公生于漢城中部寬仁坊大寺洞四街本第。時公之大人夢神人錫鍾大二字。仍命小字。」

(21) 『年譜』「公姓李。諱德懋。字懋官。初字明叔。完山人。系出璿派。定宗大王別子茂林君諡昭夷公諱善生十世孫。考諱聖浩。通徳郎。祖諱必益。江界府使。曾祖諱尚稔。通徳郎。妣潘南朴氏。兎山縣監師諱錦平尉諡孝靖公諱弼成之孫也。公號青莊館。一號蟬橘堂、炯菴、端坐軒、注蟲魚齋、學草木堂、香草園、寐宕、晚號雅亭。有雅亭遺稿四冊。印行于世。又青莊館全書鈔本二十一種三十三冊七十一卷。」

(22) 『年譜』「四月十二日。渡鴨綠江。一千六十里。五月十五日。抵皇城。二千七十五里。或云二千五十三里。留南館。凡三十日。公與中州人潘秋庭筠、李墨莊鼎元、祝芷塘德麟、唐鶯港樂宇諸人。談論唱酬。有入燕記。未及成。六月十六日。發燕京。閏六月十四日。渡江。七月初一日。還京師。」

(23) 『年譜』「己亥。公三十九歳。六月初一日。拜外閣檢書官。歳丙申。上命建奎章閣。奉列聖宸章及当宁御眞。仍置閣學士。粵三年。命閣臣。抄選文學之士。掌校讐編摩繕寫等事。設職。檢書官四員。階九品。初屬秘書省。既奎章閣也。公首膺是選。與柳公得恭、朴公齊家、徐公理修爲寮。時上教曰。校書之役。如

値浩繁。則外閣檢書官。使之入參。」

(²⁴) 河宇鳳論文(注1掲載)

(²⁵) 河宇鳳論文(注1掲載)、安大會(注13掲載)

(²⁶) 『星湖僊説』(『星湖全集』(『韓国文集叢刊』一九八～二百 民族文化推進會 1999年)) 答洪錫余 戊寅(1758)「聞有和漢名數一書至國。日本人所撰。極有可觀。或有可求處耶。如使入把。幸伝与鄙人看。」

(²⁷) 『上星湖先生書』(『順菴集』二(『韓国文集叢刊』二二九 民族文化推進會 1999年)) 戊寅「倭書有和漢名數為名者二卷。即我肅廟庚午年。貝原篤信之所著也。轉借于奉使人家。即為推去。故不得納上。伏歎。」

(²⁸) 『随槎日録』(『善隣と友好の記録 大系朝鮮通信使』六 1994年)「在京時得見日本人伊藤維楨所撰童子問、其書全以詆誣程朱講張異見為主、自謂孔孟以後獨得聖學心法、抵此因訛輩求見其所著述、得論語古義語孟字義、」

(²⁹) 伊藤維楨号仁齋。嘗自称自開門戸。以待學者。以孔子。為第一聖人。則論語一書。實為最上至。極宇宙第一書。而其第一字。是仁也。義以為配。礼以為輔。忠信以為地。又非窮理之說曰。苟以窮理為先。則雖不以德行為後。然德行自不得不在後也。是所以有害於學問也。蓋宗陽明而過高者也。著童子問三卷。又有語孟古義。語孟字義二書。行于世。当元祿之時。林道春之後進也。

(³⁰) 『盎葉記』一(『青莊館全書』五十四)「伊藤氏曰。〈名維楨。字原佐。日本人。著童子問。〉孟子之意。本非謂天下之性皆善而無惡也。就氣質之中。而指其善而言之。非離氣質而論其理也。而其所謂善者。就四端之心而言。非謂未發之時有斯理也。〈未發之時。果是空蕩蕩枯木死灰境界耶。全指氣質而言。大是迂闊。〉故曰。人性之善也。猶水之就下也。夫水之就下。在流行之時而可見焉。〈夫水停蓄之時。自然具流行之理。故流行之時。無所礙滯。亦猶未發之前。已具發皆中節之理。〉又曰。人之有是四端也。猶其有四体也。言四端之心。人人具足。不假他求。猶四体之有于其身。而相離不得也。天下之衆。間或有生而無目者。或有耳不聞者。或有四体不具者。其無有四端之心者。亦如此。」

(³¹) 『和国志』(李佑成編『栖碧外史海外蒐佚本』30 亜細亞文化社 1990年9月)

(³²) 河宇鳳論文(注1掲載)